

# 超精密機械工業都市とシルクの都との融合 イルフ精神で目指す近未来のまちづくり

## 村から市に移行した糸都・岡谷

令和3年で市制施行85年の節目を迎える長野県岡谷市は、国内に11例しかない「村から直接（町制を経ずに）市制に移行」した都市の一つだ。岡谷市が諏訪郡平野村から市へ移行したのは昭和11（1936）年4月のこと。それ以前に「村から直接市制に移行」しているのは、長崎県佐世保市（明治35／1902年）と山梨県宇部市（大正10／1921年）の2例しかなかった。また長野県内では、岡谷市の市制施行は長野市・松本市・上田市に次いで4番目に実施されているが、町制を経っていない市制施行の事例は岡谷市のみだ。

佐世保市が佐世保村から市へ移行した最大の要因は、明治19年に旧海軍鎮守府が設置されたことによる急激な人口増だった。宇部村から移行した宇部市の場合も、炭鉱都市としての急激な人口増が要因だった。それに対し

平野村（岡谷市）では、人口のピーク（約7万7000人）が市制施行以前の昭和5（1930）年に記録され、市制施行時には6万人を切っていた。ではなぜ、人口が急減し始めていた平野村に、村からの市制移行が認められたのだろうか。

実はそこにこそ、軍港都市や炭鉱都市として、重要な位置付けをされていた佐世保市や宇部市にも劣らない、当時の岡谷市が置かれた「日本における重要な位置付け」がうかがえる。

「明治・大正・昭和初期を通じて、平野村すなわち岡谷市は、日本における殖産興業および輸出産業のけん引役だった製糸業（生糸）の代表的生産地『諏訪地方』において、まさに糸都いとというべき中心的存在でした。市制施行当時の岡谷市は面積が現在（85・10㎢）の半分以下（39・39㎢）で、人口は現在（約4万8000人）より多い約6万人。ピーク時より減ってはいましたが、日本一人口の多い村でした。平野

いまいりゆうご  
今井竜五  
岡谷市長

村には数多くの製糸工場

があり、各地から来た工女さんがたくさん住み込みで働いていたのです。

平野村で洋式機械製糸が始まったのは、洋式製糸業のモデルとして群馬県富岡市に官営富岡製糸場が設置された明治5（1872）年から3年後、明治8年のことでした。諏訪湖畔の寒村に過ぎなかった平野村のそれからの成長は凄まじく、大正時代には全国の生糸生産量のおよそ20%が平野村でつく





毎年8月に開催され、市民の血を沸かせる岡谷太鼓まつり

られ、平野村を中心とする諏訪地方の生糸輸出量は世界一といわれた時期もあります。人口も付随して急増し、第1回国勢調査が行われた大正9(1920)年には平野村の人口(約6万4000人)は松本市に次ぐ県内第2位、岡谷市より先に市制施行していた長野市や上田市より多かったほどです。そんな平野村が市制施行直前の6年間で2割以上も人口を減らしたのは、主に昭和4(1929)年から始まった世界大恐慌の影響による不況



諏訪湖釜口水門から流れ出る水流が大河・天竜川の源流

や、アジアの不穏な国際情勢などを背景に、日本の生糸の最大の受け入れ先だったアメリカへの輸出が、ほぼ断たれてしまったことに要因があります。また、大正から昭和初期に普及し始めた人絹(レーヨン)の登場も、脅威の一つでした。そうした状況の下、日本の製糸工場の多くが、休業や倒産に追い込まれていきます。特に養蚕・製糸共に全国シェアのトップを長年占めていた長野県、中でも製糸業の中心的役割を果たしていた平野村への打撃は大きく、平野村の人口は急減していきました。そのような状況に直面し、村政の行き詰まりの打開を図ろうとした先人たちは、昭和8(1933)年から『人心一新』を目的に、製糸業だけのまちらから多角的工業都市への脱却を図ります。



人口が急減していても平野村が岡谷市に移行できた背景には、明治維新以来、国是の殖

### 糸都から多角的工業都市への転身

同時に市制施行、それが難しければ町村への移行を目指して可能性を探り始め、昭和10年11月に内務大臣に上申書を提出します。その結果、翌昭和11年3月に内務大臣からの許可が下り、4月1日に念願がかない、市制施行を迎えることができたのです(今井市長) 平野村から岡谷市へ、糸都から多角的工業都市への大転換の背景を、今井竜五岡谷市長(4期目)は淡々と語る。祖父である今井梧楼氏(明治25年〜昭和19年)は、平野村存亡の危機に先人たちの中心となって、市制施行を力強く推進した当時の平野村村長であり、岡谷市初代市長(3期目の半ばで病没)となる方でもあった。



日本女性のサイズに合わせ開発された諏訪式繰糸機



現代の繰糸作業の様子(岡谷蚕糸博物館)



市民協働で始まった「オール岡谷産シルクのまちづくり」(岡谷絹工房)

産興業に貢献し続けた平野村への国からの高い評価、多角的工業都市化への期待も含まれていたことは想像に難くない。糸都から多角的工業都市への転身計画は、製糸業発展の過程で培われた平野村(岡谷市)の工業技術力と、多数の製糸工場の建物・設備などのインフラ、製糸業以来の工女たちの勤勉な労働力を基盤とするもので、実際、この転身は大成功を収める。

「特に昭和14(1939)年に勃発した第二次世界大戦を契機に、国内の精密機械メーカー(現在のセイコーエプソンやオリンパスなど)が空襲を免れるため、諏訪湖周辺に続々と疎開してきてくれたことが、多角的工業都市化を推進する際の追い風となりました。そうした大企業が地元の企業、町工場な

どに技術指導をしてくれたことが、飛躍への大きな力になったわけです。同時にそれが実現できたのは、精密機械メーカーが求める良質な労働力や、メーカーと連携して部品などをつくる技術的な基盤が、製糸業の歴史を通じて、岡谷市と諏訪地方にはエリアとして用意されていたからこそといえます。

また、特にカメラや時計など精密機械の企業や工場が多く集積していったことから、岡谷をはじめとする諏訪地方はやがて《東洋のスイス》と呼ばれるようにもなります(今井市長)

岡谷市と諏訪地方の工業技術力の基盤が、製糸業の中心地へ成長していく過程で培われた背景には、製糸機械が当初はフランス製など、高価な外国製のものしかなく、国産化を

図ることが生産地として急務だったという事情もある。さらに、輸入機械は日本人の体格には合わないものが多く、日本人に適した規格の機械を創意工夫せざるを得ない状況にあったことも、逆に奏功したといえるだろう。その《創意工夫》のシンボルの一つは、岡谷蚕糸博物館に展示されている《諏訪式繰糸機(日本機械学会認定機械遺産)》だ。繰糸機は蚕の繭を煮て生糸を取り出し、繰糸するまでを一人の工女が行うためのシステムを持つ機械だが、諏訪式繰糸機は鍋を金属でなく地元産(旧高遠町・辰野町)の陶器製に、フレームを金属から木製に換えただけでなく、全体の規格が小柄な日本女性に合うように工夫されている。

平成26年に世界文化遺産に登録された富岡製糸場が立地する群馬県富岡市と岡谷市は、官営富岡製糸場が誕生してちょうど100年後の昭和47(1972)年に姉妹都市提携を締結している。官営工場(モデル工場)として常に最新鋭の外国の製糸技術を、機械とともに導入し続けた富岡製糸場が立地する富岡市と、富岡製糸場を模範としつつ、独自の工夫を凝らした機械を次々に作り、世界一の生糸の輸出量を誇るようになつた岡谷市。維新後の日本の殖産興業を車の両輪となつてけん引した両市が、姉妹都市として親しく交流し、令和4年には締結から50年の節目を迎えるという事実はとても興味深く、心温まる歴史の一コマという感がある。

## 次世代育成を目指す 小型ロケットプロジェクト

官民協働で製糸業のまちから多角的工業都市への転身に成功した《ものづくりのまち・岡谷》は、常に時代の要請に応えながら高度経済成長時代などを経て発展していき、80年代ごろからは、持ち前の光学・精密・機械などの多彩な技術を基にした、超精密微細加工技術による部品や製品の供給基地としての地歩を固めていく。

「現在では切削、研削、研磨、プレス、板金、鍛造、熱処理、メッキ、塗装など、製造業の基盤である多様な高度技術を保有する企業が多く立地しており、超精密微細加工が特徴の工業集積地として、《メイドイン岡谷》の部品や製品を国内外に供給しています。

岡谷市の製造業は比較的小規模な事業者が多数を占めていますが、粗付加価値率が県内19市のトップを維持するなど、高付加価値製品を生み出す強みを持っています。

さらに、最近では培ってきた高度な技術をより進化させ、従来手掛けてきた自動車や省力化機械はもちろん、健康・医療・ヘルスケア機器、航空・宇宙、環境・エネルギーなど、今後の成長が見込まれる産業分野への参入にも力を入れております（今井市長）

具体例を挙げれば、医療分野では人体に用いる医療機器部品の塗装や、医療現場で用い

る補助器具の製造などの供給が増えているという。また、電気自動車に搭載されるリチウムイオン電池の外装部品などは、世界的な電気自動車メーカーに採用されており、スマートフォンやタブレット、ゲーム機などの次世代通信端末機の関連部品も多くの企業が供給している。

岡谷市では県とも連携しつつ、そうした市内企業への営業面の後押しやマッチング支援、技術支援などの他、次世代の育成支援や人材確保に向けた取り組みも多彩に実践している。

「次世代育成の一つの事例としては、平成15（2003）年から始めた《ものづくりフェア》の開催があります。毎回、市内外から延べ5000人以上の子どもたちや学生、ご家族の皆さんなどにも来場していただいております。そして実際、過去の《ものづくりフェア》に参加

した学生や子どもたちの中から、学校を卒業後に市内企業に就職し、第一線の技術者として活躍している例も少なくありません（今井市長）



数多くの子どもたちが毎年参加する「ものづくりフェア」



岡谷での起業を目指す若者たちが対象の創業スクールも好評

次世代育成を目指す「夢のある取り組み」としては《SUWA小型ロケットプロジェクト》が挙げられる。平成27年度開始の取り組みで、同年度から令和元年度までは地方創生関係交付金を活用した「諏訪圏6市町村（岡谷市・諏訪市・茅野市・下諏訪町・富士見町・原村）による《SUWAブランド創造事業》の一環として実施された。具体的には「小型ロケット製作を通じたものづくり技術の高度化と人材育成」を行うもので、信州大学に事業委託している。

同プロジェクトは令和2年度以降、内閣府の地方創生推進交付金を活用し、諏訪圏の5市町村（岡谷市・諏訪市・茅野市・下諏訪町・



SUWAブランド発信のシンボル(SUWA小型ロケットプロジェクト)

原村)との連携による「モノづくり集積地SUWAのヒトづくりプロジェクト」へと発展。従来の取り組みに加えて、「若年層からのものづくり人材の育成」などをテーマに、信州大学や地元企業の協力の下に、圏域の小中学校でロケットに関する勉強やモデルロケットの打ち上げ体験を行う「SUWA小型ロケットプロジェクトワークシヨップ」を実施している。また、技術系の学生や企業の若手技術者との交流を通じた「ロボットキット」の開発および、それを活用した各種子ども向け体験イベントなどの計画も今後は実施していくという。



子どもたちの工業技術への関心を高める「モデルロケット打ち上げ体験」

## イルフ精神あふれる シルク岡谷復活計画

製糸業の勃興以来、現在に至るまで一貫して、モノづくりのまちとして歩んできた岡谷市だが、再三触れているように製糸業が盛んな時代には数多くの工女たちがいた。平野村の人口が約7万7000人でピークを迎えた頃、そのうちの約3万5000人が製糸工場に働く工女たちだったとされる。また、多くは10代だったため、休日ともなると若い女性たちが、大げさでなく市内の商店街を埋め尽くすことも珍しくなかったという。

「そのために岡谷では商業も盛んになりました。当時は娯楽施設も多く、諏訪地方の他

のまちからも、岡谷に遊びにくる人たちは多かったと聞いています。岡谷には現在も、諏訪地方では珍しい映画館やボウリング場もあり、やはり周辺地域の方々から『無くさないでほしい』とよく言われます(笑)。さらにその周りには、『イルフ童画館』をはじめとする文化施設も立地しています。人口の割にそうした娯楽・文化施設が充実しているのは、やはり製糸業が盛んだった頃に培われた繁華街としての名残といえるのかもしれない(今井市長)

『イルフ童画館』は、童画という言葉を創出し、童画の世界を芸術的な域まで高めたことで知られる、岡谷市出身の童画家・武井武雄の世界を顕彰・展示するための美術館だ。同時に、漫画や童画、絵本などの意欲的かつ多彩な企画展示を行うことでも定評がある。

また『イルフ』は『古いフルイ』を逆さまにした武井武雄の造語だ。新しい様式の子どもの玩具や童画、絵本などを提唱した武井武雄ならではの、斬新なキャッチフレーズといえる。そしてイルフ童画館のある岡谷市の中心市街地、かつて工女たちが闊歩(かほ)したと思われる通りの周辺は現在『童画館通り』と名付けられており、イルフの名称を冠した商業施設や市立岡谷美術考古館、前出の映画館、ボウリング場などの娯楽施設、多彩な飲食店、生涯学習活動センター・子育て支援施設などが近辺に集中している。

また岡谷市の市街地を歩いていると、精密

# 岡谷市

市 政 ル ポ

(長野県)



イルフ童画館には全国から武井武雄ファン、童画ファンが来館

機械工業関連の工場だけでなく、みそやしょうゆの醸造所、酒蔵の建物などともしばしば遭遇する。さらに市街地で今も確かな存在感を放っているのが、市内各所に点在する15件の近代化産業遺産(経済産業省認定)だ。さらに国内に4カ所しかない製糸工場の一つ(宮坂製糸所)をそのまま併設した岡谷蚕糸博物館が、市役所の裏手に立地している。

そして岡谷を訪れたら見逃せないのが、現・市役所庁舎にほぼ隣接している旧岡谷市役所庁舎(初代市庁舎)だ。鉄筋コンクリート造2階建て、瓦ぶき、延床面積1517㎡の堂々たるこの和洋折衷建築は、岡谷市が市制施行した昭和11(1936)年に建設されている。



市制施行に合わせて建設された旧岡谷市役所庁舎

「平野村が岡谷市へと移行する際の内務省からの条件の一つが、市役所にふさわしい庁舎を用意できるかということでした。そこで当時の平野村村長だった私の祖父・今井梧楼の呼び掛けに応じ、これを寄贈してください」たのが岡谷を代表する製糸家で、数多くの企業の役員を歴任された尾澤福太郎さんでした(今井市長)

岡谷市初代の市庁舎は、存亡の危機を迎えた製糸業のまち・平野村が多角的工業都市へと転換し、現在の超精密工業都市へと成長する一つの大きなスプリングボードになったのだ。

岡谷市では現在「第5次総合計画(2019〜2028年度)」に基づくまちづくりを推



スケートは岡谷のソウル・スポーツ

進。人口減少抑制に向けたブランディング事業の一環として、養蚕から製糸、製品化までを全て行う「オール岡谷産シルクのまちづくり」に取り組み始めた。近年力を入れている近代化産業遺産の観光面からの活用とともに、かつての糸都・岡谷に新たな息吹を加える発信事業として注目される。

このような超精密工業都市としての実力を基盤に、糸都時代の数々の遺産がもたらすソフトなイメージを核に現代の新しい感覚、すなわちイルフの精神を付加することで推進される岡谷市の硬軟自在なまちづくり。新旧の地域資源をフル活用する取り組みと言える。(取材・文〓遠藤隆/取材日令和2年12月15日)